

留学報告書 2017年6月

村上愛

留学したいと初めて思ったのはいつだろうか。留学したいと二言目には語るようになって久しく、いつのころから意識していたのか記憶は定かでない。

海外への羨望 2007年、今から10年前の夏、広島県の南東に位置する福山市の高校で東京大学を目指そうと決めた。漠然とながらも、『海外』という大舞台で『戦える』人間になるためには日本の最高学府くらい出ていなければならない、と考えていたことは確かだった。当時は憧れている『海外』とは何なのか、また『戦う』とはどういうことなのか具体的に思い描いていたわけではなかった。しかし地方の工業都市で送る日々の生活は退屈で、将来の希望も感じられなかった。バブル崩壊後に生まれた世代として、10代の記憶は失われた10年(後に20年)と呼ばれた経済の停滞時代である。地方社会に蔓延していた閉塞感は重く、世界当時第二位の経済大国とは思えないものだった。閉塞感の原因を知るべく、大学では経済学を勉強すると決めていた。自然と、大学にまず入ってから海外に留学しよう、というプランを立てていた。その後、東京大学入学後米国に1年間留学したことにより、プラン通りだったようにも見える。しかし当初思い描いていた状況とは異なっていた。

最初の渡米 2011年3月、東日本大震災が発生した。大学に入学し、1年目が終わろうとする時期だった。震災後、東京の雰囲気は様変わりした。駅の動かないエスカレーター、消灯したままの東京タワー、空調を止めて重苦しい空気の立ち込める屋内。街角には不安が漂っていた。テレビをつければ日々原発事故と被災地の窮状に関する報道が流れていた。当時誰もが考えたように、自分が復興のためにできることは何か、悩んだ。「学生なら勉学に励むことで被災地を支援すべき」との忠告を受けたこともあり、悩んだ末「日本の外に出て『海外』から日本を見つめよう、そして復興後の日本の10年後20年後の未来を描ける視野を手に入れよう」と決意した。震災復興として留学を考えるなど論理が飛躍しているようにも聞こえるかもしれないが、そうではない。原発事故の報道が『海外』で様々な観点から取り上げられていたため、日本という国が『海外』からどのように見られているのかこの目で確かめたいと思ったのである。また、震災直後は(必要不可欠ではあるものの)短期的な復興計画の話が多く、海外経験によって得られるだろう俯瞰的な視点は、日本の将来の展望を長期的に考える上で必須と考えてのことだった。2011年の8月、スーツケースを握りしめ、単身初めて渡米した。

大学院留学という選択肢 米国滞在は1年間、その間にいくつもの貴重な出会いをしたことにより、当初の目的をいくつか達成し、また新たな目標を抱いて日本に戻った。1つ目、『海外』から日本がどのように見られているか、という私の抱いていた疑問に関してエピソードを紹介したい。私は出身地を述べるときに”I'm from Hiroshima.”とすることが多い。しかしあるとき、”Oh, you are from Fukushima. How do you think about the accident at atomic plants?”と質問された。どうも発音の問題などではなく広島と福島の違いが分かっていないようだった。米国で広島出身と名乗り、原子爆弾について意見を求められたことは

幾度もある。しかし、福島と間違えられたうで原発事故について尋ねられたのは意外だった。よく考えると Hiroshima と Fukushima は英語で綴ると -shima が共通している上に、いずれも atomic bomb と atomic plant という単語と共に世界に知られている地名である。なるほど、日本にとっての一大事ですらこの程度の類似によって同列に扱われてしまうのか、と思った瞬間だった。日本のプレゼンスが経済、政治的に後退する中、日本の問題について国際社会の認知を得ることの難しさを感じさせる体験となった。

2つ目、日本の将来を展望するような俯瞰的な視点は到底得られなかったものの、米国在住で働く日本人の方々との出会いは非常に示唆的だった。日本の展望を考え俯瞰したい、という抽象的で一般的な発想から、個別的に、日本という生まれ故郷と自分の人生をどう位置付けるか、という問いに関心がうつるきっかけとなった。あるとき、国際機関等で働く在米日本人が集う勉強会に参加した。普段日本人ということ意識して働くことはありますか、と長く務める男性に問いかけた。そんなことは全くない、プロフェッショナルとしての意識しかない、という答えに衝撃を受けた。漠然と憧れていた『海外』で『戦う』ということにイメージがわいた時でもあった。プロフェッショナルにとって国籍は意味がない、ということも悟った。しかし同時に、勉強会に集っている誰もが日本について時には温かく時には厳しく意見を交わしているのを目の当たりにした。1人の日本人として故郷を思う心を持ち続けることと、国籍を意識せずにプロフェッショナルな能力で働くこと、それらが対立することなく個人の中で併存可能であると知って感動した。そのような人間になりたいと思った。米国を後にする時、プロフェッショナルな能力を究めるために再び、今度は大学院に留学しよう、と決意していた。また、日本という故郷の良さをもっと理解したい、と思いながら帰国の途についた。

経済学を志して どの道でプロフェッショナルを目指すのか。結果的に、プロフェッショナルな職業として、大学受験時と同じ選択肢である経済学を再び選んだ。1つには、経済学の分析対象と私の関心が改めて重なったことである。経済学は社会制度を分析する。米国という日本以外の社会にふれたことにより、社会によって制度が異なることを肌で感じた。そして社会制度が異なれば、制度が及ぼす影響もまた異なるのだった。異なる社会制度の下で人々がどう行動するのか、経済学を用いれば分析可能となる。また、社会制度によって人々の行動が限定されることもあるとわかる。経済学を学ぶにつれ、人々に蔓延する閉塞感もまた、社会を構成する制度や枠組みによって生じると考えるようになった。かつての問い、「なぜ経済大国日本で閉塞感が生じるのか」、をより抽象的に捉え、分析可能な問いに昇華するための方法が経済学にはふんだんにある。学究心は尽きそうにない。また、分析対象だけでなく、分析手段も経済学は魅力的だ。経済学の言語は英語と数学のため、国籍や文化などに依存しない解析手段と発信方法をもつ学問として位置づけられている。経済学を武器に『海外』で『戦う』自分の姿が思い描けるようになり、研究者の道を選んだ。

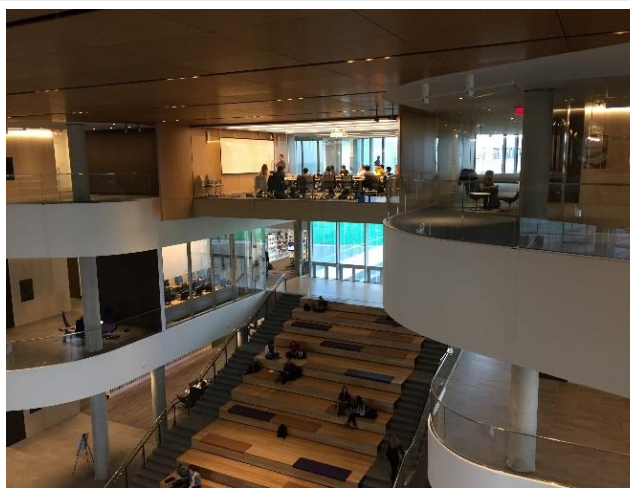
再び米国へ 2017年4月、米国中西部、シカゴ近郊に位置する Northwestern 大学を訪れた。合格内定者向けの説明会に参加するためである。研究者を志すと決めた時から、世界で

通用する学者となるために、米国の大学院で経済学を学ぶことは必然と考えていた。中でも、Northwestern 大学経済学部は世界でもトップクラスのレベルを誇る。私が専門とする分野の専門家が他校に比べて群を抜いて多いだけでなく、既に Northwestern 大学経済学部で博士号を取得して活躍している日本人の経済学者も後を絶たない。説明会に出るために Northwestern 大学経済学部を訪れたときには既に合格許可を受理し、正式に留学することを決めていた。

2007年から2017年、そして2007年に萌芽を見せていた夢が10年の後、2017年にやっと蕾を付けている。花を咲かすにはまだ遠いものの、枯れることなくここまで育てることができたのはひとえに支えて下さっている多くの方々のおかげである。末筆ながら、この場をお借りして、留学を御支援して下さいる船井情報科学振興財団に心からのお礼を申し上げたい。蕾となった花を咲かすことができるかどうか。それは次の10年の間にはっきりとわかるだろう。10年かけて育てた夢を次の10年でしっかりと花開かせたい。2027年に向けて新たな挑戦が始まる。



Northwestern University (経済学部)の建物テラスよりミシガン湖を隔ててシカゴの摩天楼を臨む。



Northwestern University (経済学部)の授業風景。ガラス張りのため教室が宙に浮いているように見える。大階段は座れるように布張りの部分と板の部分が交互に配置されている。